

戸田市の教育に期待すること

21世紀型スキル育成アドバイザーとして活躍する3名から激励のメッセージをいただきました。



株式会社リバネス 執行役員
リバネス教育総合研究センター 主席研究員

森安 康雄 氏

今年度は教育センター研究員イノベーション教育部会にかかわらせていただきました。これは全国の自治体の中でも非常にユニークな取組かと思えます。イノベーターはどのように生まれ育つのか。それを実感するために30代の若手起業家によるワークショップを行いました。非常に印象的だったのは、彼らが小中学生の頃から目的を持って学んでおり、それには教員や家族とのポジティブな関係性が大きく影響していることでした。今の小中学生は、教員や

親が全く経験したことのない職業につく可能性も高く、既存会社組織ではなく自ら起業する人も多く現れるでしょう。そういう子供たちの可能性をどのように引き出せば良いのか。イノベーション教育部会の大きなテーマですが、ひとつだけ明らかなのは、教員の方々が学校内だけを見ていては指導できないということでしょう。学校や教科の枠を超えて、地域社会の異なるステークホルダーとどう連携していくか。そういう発想力と行動力が子どもたちに伝えられるものは多いはず。その意味で先生方には境界を越え、学校の内と外をつなぐブリッジコミュニケーターとしての役割を鍛えることを期待します。キーワードは「越境」です。



情報通信総合研究所
ICTリサーチ・コンサルティング部 特別研究員

平井 聡一郎 氏

新学習指導要領の完全実施を目前に控え、戸田市は一昨年からはプレゼンテーション大会を開催してきました。そこで2年目を終えた今、取り組みを見直してみたいと思います。なぜプレゼンテーションを授業に組み込むのでしょうか？私たちは、たくさんのインプットを子供たちに提供してきましたが、以前はインプット中心の受け身の学びであり、真の学力に繋がりませんでした。そこで、インプットから課題意識を持ち、解決し、そして自分なりの解決策

を他者に伝えるようにアウトプットすることが求められます。さらに、アウトプットされたプレゼンテーションは、聞く者にとってはインプットであり、プレゼンターへのフィードバックが返されます。これはプレゼンターにとってのインプットとなり、インプット→アウトプット→フィードバックという学びのサイクルに繋がっていきます。日々の授業でも、発表という課題に対する回答のプレゼンテーションが行われ、そこには質問や同意といったフィードバックが返されます。評価の観点が共有され、聞き取る力が身についた児童生徒にとって、フィードバックはまさに相互評価となります。児童生徒自身が評価し合うプレゼンテーション大会！目指してみませんか？



フューチャーインスティテュート株式会社 代表取締役
教育ICTリサーチ 主宰
セサミストリート・ティーチャー

為田 裕行 氏

戸田市の21世紀型スキル育成アドバイザーとして、戸田市の多くの学校で校内研修、公開研究授業、プレゼンテーション大会などの場で、先生方とご一緒させていただいています。戸田市の先生方の新しいことを学び続け、チャレンジを続ける姿勢は素晴らしいと思っています。そうした先生方が作っている学校文化の中で育つ児童生徒は、先生方と同じように、学び続け、チャレンジを続ける大人になると信じています。

日々のお仕事が大変だとは思いますが、児童生徒が社会に出る10年後、20年後に、どんな社会になっているのかということについて考える機会を持っていただきたいと思います。10年前から、社会もライフスタイルも大きく変わりました。これからの10年、20年も、変化は速いことでしょう。子供たちがこれから社会とどんなふうに関わっていくのかということを考えていきましょう。

社会の動きやテクノロジーの発展などを考え、「今までこうだったから」と言うことだけで思考を停止させず、常に思考を続けていていただきたいと思います。そうした先生方が多い戸田市の小学校・中学校だからこそできる教育が必ずあると信じています。